研究論文

翻訳のプロセス：起点テクストの首尾一貫性を探る

Making Sense of the Source Text in the Process of Translation

菊　地　敦　子
Atsuko Kikuchi

In translating a short article by Ruth Benedict called 'A Matter for the Field Worker in Folklore', published in the book *Anthropologist at Work,* a collection of papers and correspondences by Ruth Benedict compiled by Margaret Mead, we came across numerous sections where Benedict referred to important concepts by different words without defining the terms, used anaphora without making clear what it referred to in the context, and gave examples without making clear what point she was trying to exemplify. In this paper, I list these examples and explain how we made sense of Benedict's writing by accessing knowledge that we possessed regarding the state of affairs in anthropological research at the time of this paper and the influence of Franz Boas on Benedict's approach to fieldwork. By doing so we found the theme of the article, the cohesive ties between sentences and hopefully, we were able to create a translation that was coherent.

キーワード
Ruth Benedict, translation process, cohesion, coherence, translator's role

1．はじめに

近年、翻訳研究は、これまで中心的だった起点テクスト（source text, ST）と目標テクスト（target text, TT）の言語的要素の比較研究（Catford, 1965; Vinay & Darbelnet, 1958 など）から、翻訳のプロセスにおいて翻訳者の頭の中で何が起きているのかを考察する研究になってきている（Halverson, 2013）。その研究法の一つが TRANSLOG 技術を使った研究法（Jakobsen, 2006）で、この技術を使うと翻訳のプロセスで翻訳者がコンピュータに打ち込んだすべてのデータを見ることができる。アイトラッカー技術を合わせて使うと、翻訳者がどれだけの時間スクリーンのどの項目を見ていたかを知ることも可能になる。しかし、このような技術を駆使して翻訳者の頭の中で起きていること、つまり、翻訳のプロセスがどれだけ解明されるかはまだその結果を待っているのが現在の段階である（Halverson, 2013）。

TRANSLOG 技術やアイトラッカー技術により翻訳者の「迷い」、どこで引っかかるかといった情報は得られる。その情報によって ST のどの部分が翻訳者に負担（burden）をかけているのかがわかる。しかし、何を迷っているのか、どうしてそこで引っかかっているのかといった情報は得られない。翻訳者が頭で考えていることがコンピューターのキーストロークにすべて現れるわけではないからである。

翻訳者が考えていることを考察するためにこれまで使われてきた方法として、think-aloud protocols（思考発話法）というのがある。翻訳をしながら翻訳者が頭で考えていることを声に出して説明し、その内容の分析から翻訳のプロセスについて何かを引き出す研究法である（Krings, 1986; Lörscher, 1991 など）。このような研究はケース・スタディの場合が多く、そこから翻訳に関する理論的考察をするのは難しい。しかし、言語学が記述言語学から始まり、その後言語の中の普遍的な要素、理論につながる考察が生まれたのと同様に、翻訳研究でも翻訳者が実際に考えていることを地道に記述していくことから始めなければ、データに裏付けされた翻訳理論は生まれない。Roger Bell は次のように述べている：

> ‘…focus on the description of the process and/or the translator…form the twin issues which translation theory must address: how the process takes place and what knowledge and skills the translator must possess in order to carry it out.’（Bell, 1991, p. 43）

本稿も翻訳プロセスの一つのケーススタディである。特にこの翻訳の例を取り上げたのは、ST の著者であるルース・ベネディクトが言うなれば、「翻訳者泣かせ」の文章を書くからである。

10 年位前から私は福井七子氏と *Anthropologist at Work*（Mead, 1959）の翻訳作業を行ってきた。この本は、ルース・ベネディクトの友人であった文化人類学者マーガレット・ミードがベネディクトの死後 10 年を経た 1959 年にベネディクトが遺した論文、日記、書簡などをミードの視点によってまとめたものである。私たちが「セッション」とよんでいる研究会でよく話題になるのがベネディクトの考え方や言語についての問題である。特にベネディクトが頻繁に使う曖昧な表現をどう解釈したら良いのか何時間もの時間を費やして話し合った。

本稿は、この本に収められたベネディクトの論文、“A Matter for the Field Worker in Folklore” を翻訳するにあたって、ベネディクトがこの論文で言わんとしていることを私たちがどのように解明していったかの記録である。しかしその前に明らかにしなければならないのは、なぜベネディクトの文が「翻訳者泣かせ」なのかという点である。そのことを説明するのに次のセクションで M.K. Halliday の cohesion と coherence の概念を紹介する。

2．起点テクストの分析

翻訳学には1970年から1980年代に盛んだった「機能主義的アプローチ」（functional theories of translation）を呼ばれている分析法がある。当時言語学の分野で発展を見せていたテクスト分析に基づいたアプローチで、テクストが果たす機能によってテクスト・タイプを分けることができ、翻訳の等価（equivalence）はテクスト・レベルで考えなければならないと言われた（Reiss, 1971）。しかし、STが書かれた特定の時代背景、文化的環境などを考慮すると、時代背景、文化的環境が異なるTTが必ずしもSTと同じ機能を果たすとは考えられず、テクスト・レベルでの等価に対する批判が多かった。しかし、このアプローチによって翻訳学は単語や文レベルの分析から解き放され、テクスト全体を考慮するようになった。そして1990年代には言語学者Hallidayの談話分析モデル（Halliday, 1994）を使ったST/TTのテクスト分析が盛んに行われるようになった。Hallidayの談話分析モデルで重要なことは、言語使用者が社会的状況、言語的コンテクスト、目的などを考慮して言語表現を選択し、それによって相手に「意味」を伝えているということである。談話をつなぎ合わせている要素の一つとしてHallidayはcohesionあるいはcohesive tiesという概念を取り入れた（Halliday, 1994）。Cohesionとは、文法あるいは語彙によってテクストの中の文と文がつなぎ合わされるということである。Cohesionの例として次の1aと1bの文をあげることができる。

1. a. John came to the party.
   b. <u>He</u> brought <u>his</u> girlfriend along.

1bの文のHeとhisは1aの文にあるJohnを指しているので、1aと1bの文はHe, hisでつながっていると言える。そのため、HeとhisはcohesionをTを表している。

上の例は代名詞によって1bの文が1aの中の先行詞（antecedent）を指している例だが、but、and、so、however などによって文と文がつながっていることもある。下の2bの文はhowever によって2aの文とつながっている。

2. a. My father likes to watch TV.
   b. My mother, however, hates TV.

Cohesionが文レベルのつながりを表しているのに対し、テクスト全体のつながりを表しているのがcoherence（首尾一貫性）である（Halliday, 1994）。談話（discourse）とはバラバラの文の集合体ではなく、coherenceをもつ文の集合体であるとされている。談話のcoherenceを構成する要因が何であるかはっきりわかっているわけではないが、談話が何について語ってい

るのかを表す theme が同じであることだと言われている（Halliday, 1985）。翻訳者が扱う ST も一つの theme でつながっている談話だと言える。

Cohesion も coherence も談話の中の要素をつなぎ合わせるという点で共通しているが、そのつながりを見出すのは読者あるいは聞き手に委ねられている。ST の著者はつながりが明らかだと思い he、it などの代名詞を使ったり、他の言い方で同じことを表したり、however、so などで文をつなげたりするのだが、読者、あるいは翻訳者にとってそのつながりがはっきりわからないことがある。また、ST の著者はテクスト全体で一つの theme について語っているはずなのだが、テクストの各セクションがどのようにして全体の theme をサポートしているのか明確ではないことがある。これは翻訳者にとって大きな問題である。

本稿で扱うベネディクトの論文を理解するにあたって上のような問題に何度も直面した。本稿ではその例を示し、いかにして ST の首尾一貫性を TT の読者に理解できるように訳したかを説明する。翻訳をするにあたって、統一的 theme が何であるのか、前後の因果関係は何であるのかを考え、ベネディクトの談話の中の首尾一貫性を読み取ろうと最大限の努力を払ったことは言うまでもない。そこで必要となったのは、これまで読んだベネディクトの論文、恩師ボアズとの手紙のやり取りの内容、日記から読み取れる内容などの記憶と、それをもとにした推理である。その具体例を示すことによって、ST を理解するには、字面の意味を理解するだけではなく、様々な知識や推理を駆使して言語外のことも理解しなければならないことを示したい。

3．翻訳のプロセス

私たちがベネディクトのこの短い論文を翻訳するにあたって、どこでどのようなことを考えていたかを表にして記録することにした。それが下の表である。左の欄には原文を一文ずつ入れた。ベネディクトは長文を頻繁に使うので、問題箇所を明確にするために長文をいくつかに分けて記した箇所もある。合計 20 の文または文節に分けて表の左の欄に記した。2 つ目の欄には初期の翻訳を入れた。3 つ目の欄にはその文を訳していて気づいた問題点を書き記した。そして最後の欄には最終訳を入れた。文によっては複数の問題点があるものもあり、また、いかなる問題点も感じさせない文もあった。問題点がない場合には問題点の欄に「特に問題なし」と書き、初期と最終訳に相違は見られない。しかし、問題がある文にコンテクストを与えるため、全ての文を最初の欄に書き示した。本稿では ST の首尾一貫性をどのように理解し、首尾一貫した形で TT を構成したかに焦点を当てている。そのため、その他の理由で初期の翻訳で選択した語彙と最終的に選んだ訳語が多少違っていても本論の焦点から外れるため取り上げていない箇所もあることをお断りする。

	原文	初期の翻訳	問題点	最終訳
1	（タイトル）A Matter for the Field Worker in Folklore	フォークロアにおけるフィールドワーカーの役割	• A Matter は非常に抽象的な語であるため、どのように訳すか迷った。A Matter を「フィールドワーカーの仕事」と最初考えたが、「仕事」が何を指すのか具体性に欠けると感じた。 • 前置詞 in + folklore を「～における」と訳しがちだが、日本語として成立しないのではないか。どういった意味なのかわかりにくい。	フォークロア研究をする際にフィールドワーカーが考慮すべきこと
2	The more intimate our knowledge of folklore the more conscious we become of the part played in it by traditional material, as distinguished from the role of firsthand observation, definite recording of tribal custom, tribal history and the like.	フォークロアの知識が深まれば深まるほど、伝統的な資料の役割について考えさせられる。伝統的資料は、直接観察することによって得た資料や部族の習慣や部族の歴史などを記録したものとは異なった役割をもっている。	• 長文であるため、わかりにくい。わかりやすくするために文を次のように分ける必要があった。 文 1：The more intimate our knowledge of folklore, the more conscious we become of the part played in it by traditional material; 文 2：The role of traditional material is distinguished from the role of firsthand observation, definite recording of tribal custom, tribal history and the like. • 著者は伝統的資料について論述することを文 1 で明らかにし、伝統的資料と相対する資料とは何かを文 2 で示した。 • Traditional material を「伝統的資料」と最初は訳したが、論文を読み進めるに伴ってその内容が「部族の中で言い伝えられてきたこと」だとわかった。そのため、訳を「伝承されてきたこと」に変えた。 • Traditional material に相対して存在するのが firsthand observation, definite recording of tribal custom, tribal history and the like である。これらのデータはフィールドワーカーが現地で集める情報である。この二つの相対する情報、つまり、部族内で伝承されてきたこととフィールドワーカーが直接観察して得た情報を対比するためにも文を二つに分ける必要がある。 • Material は資料のような物理的なものを指すこともあれば、口頭で伝えられてきたことを指すこともある。日本語の「資料」は通常物理的なものを指す。そのため、どちらのタイプの資料にも使える「データ」とした。	フォークロアの知識が深まれば深まるほど、部族の中で伝承されてきたことがフォークロア研究の中でどのような役割を果たしているかについて考えさせられる。伝承されてきたことは、直接観察することによって得たデータ、部族の習慣や歴史などを記録したものとは異なった役割をもっている。

	原文	初期の翻訳	問題点	最終訳
			•「伝承されてきた」にすると誰に伝承されたのか明確にすることが必要である。文 1 で知識を深めるのは研究者であるが、「伝承される」のは研究者ではなく、部族になるので、それを明らかにする必要がある。 •「フォークロア」とは何か。「民俗」と訳してもよかったが、カタカナで「フォークロア」とした方が応用範囲が広いと判断した。「フォークロア」には伝承されてきたこと、習慣なども含まれる。	
3	We no longer make painstaking analyses of the migration legends of southern North America, and the absence of such traditions is not regarded as proof of a prehistoric origin at that spot.	北米南部の部族の移住に関する伝説を苦労して分析する人がいなくなると、そういった伝説は存在しなくなる。しかし、移住の伝説が存在しないからと言って、大昔からその地域に人が住んでいたことにはならない。	• 原文は非常にわかりにくい。ベネディクトはとかく遠回しな言い方をする。それが特徴と言えるかもしれない。移住の伝説がないことと、その地に最初から人が住んでいたかどうかの結びつきがわかりにくい。普通に考えたら、「移住の伝説がないからと言って、移住が存在しなかったことにはならない」となる。しかし、この文では、「移住の伝説がないからと言って、大昔からその地域に人が住んでいたことにはならない」となっている。移住に関する言い伝えがなくても、人々はそこに移住してきたのかもしれないという結論は同じなのだが、ベネディクトは「大昔からその地域に人が住んでいたことにならない」という否定文を使っているため文をわかりにくくしている。ベネディクトがあえてこのような複雑な言い方をしたのは、言い伝えがあるかないかということだけで結論を導いてはいけないことを強調したいためなのではないかと思う。 •「伝説」を「言い伝え」に変えたのは、部族内で人々が口にしていることを訳語に表したためである。 • origin が何の origin なのかわからない。その民族の origin? 私たちはその民族の origin と解釈した。 • 直訳すると「我々研究者は北米南部の移住に関する伝説を苦労して分析しなくなった。そのような伝説が存在しないからと言ってその民族が有史以前からその地にいたことにはならない」となっている。	北米南部の部族の移住に関する言い伝えを苦労して分析する人はいなくなったが、そのような言い伝えが存在しないからといって、大昔からその地に人が住んでいたと考えることはできない。

	原文	初期の翻訳	問題点	最終訳
			• 最初は言い伝えを分析しなくなったことを否定的に語っているのかと思ったが、次の段落を読むと言い伝えは必ずしも信用できないと考えていることがわかる。そのため、表現を少し変えて、分析しないことは問題ではないような言い方にした。	
4	This same skepticism concerning the face-value of folklor-istic material holds also in the matter of customs and of belief.	フォークロア的資料をそのまま受け入れてはならないのと同様に、部族の習慣や信仰に関する資料もそのまま受け入れてはならない。	• Folkloristic material というのは地元の人達がその土地の伝統的なことだと言っているデータを指すと思われる。 • 文 2 の訳文では material をデータとしたが、「データ」はフィールドワーカーが集めた情報を指すと考えられる。この文で material は部族内で言われていることを指しているため、「データ」とは訳さず、「地元の人が言っていること」とした。	フォークロア的データをそのまま受け入れてはならないのと同様に、部族の習慣や信仰について地元の人が言っていることもそのまま受け入れてはならない。
5	It is easy to point out instances. The Zuni in common with the Hopi have courting stories of the suitors who offer bundles in sign of courtship.	例えば、ズニ族にはホピ族と同様に恋愛対象者に対して色々なものを貢ぐといった話は数多ある。	• Bundles を「貢物」としたが、最初はネイティブ・アメリカンの文化で特殊な役割を果たす medicine bundles のことかという疑念が生じた。通常、bundles は数詞として使われ、bundles of ～となるはずである。しかし、ここでは bundles だけなので、特定の物を指していると思われる。インターネットで調べると日本語ではほとんど情報がない。英語で Native American, bundle を検索するとネイティヴ・アメリカンが儀式などに使う神聖な物を束にしたものだと記載されている。さらに、インターネットでズニ族とホピ族の交際の儀礼を調べたところ、恋人に貢物をすることがわかったので「恋人への貢物」と解釈した。そのため初期の翻訳のままとした。	例えば、ズニ族にはホピ族と同様に恋愛対象者に対して色々なものを貢ぐといった話は数多ある。
6	But this is not a Zuni custom.	しかし、これはズニ族の伝統ではない。	• Tradition という英語は「伝統」という意味だけではなく、「慣例」、「慣し」、「習慣」という意味も含んでいる。恋人に貢物をするのは「伝統」というより「習慣」に近いと思われる。 • 論文にははっきり書かれていないが、ベネディクトがここで言いたいのは、恋人への貢物に関する言い伝えがズニ族、ホピ族の間に存在していても、それはズニ族、ホピ族の文化の一部ではないということである。	しかし、これはズニ族の習慣ではない。

	原文	初期の翻訳	問題点	最終訳
7	In the “Hoodwinked” Dancer story of the Kaibab Paiute, Rat sends home those of the mountain sheep and deer that he has not killed, promising to cremate their dead companions at sunset;	もう一つ例として、カイバブ・パイユート族の「だまされた」ダンサーの話がある。この話の中でラットは殺していない山羊と鹿を家に帰らせ、死んだ山羊と鹿を日没に火葬すると約束する。	この文の前半は特に問題なし	もう一つ例として、カイバブ・パイユート族の「だまされた」ダンサーの話がある。この話の中でラットは殺していない山羊と鹿を家に帰らせ、死んだ山羊と鹿を日没に火葬すると約束する。
8	but he makes a fire to cook their meat which he has prepared.	しかし、実際には山羊の肉を焼いて、食べる準備をする。	• この文章で which he has prepared が fire を修飾しているのか、meat を修飾しているのかはっきりしない。直前の名詞 meat を修飾していると考えるのが妥当だと思われる。	しかし、実際には山羊の肉の下ごしらえをし、調理のための火をおこす。
9	However, the Paiute never burn their dead;	しかし、パイユート族は自分たちの死者を火葬することはない。	• この文が However で始まる理由がはっきりしない。However は通常、前に現れる文の内容とは異なることを述べるときに使われる。However の文ではパイユート族が死者を火葬しないと言っている。つまり、however は、「ラットが死んだ山羊と鹿を火葬する」と言う箇所と逆のことを言っていることを強調している。しかし、逆のことが述べられている箇所が however と離れているので、日本語にした場合、「しかし」で次の文を始めるのはおかしい。However の直前にあるのは、「しかし、実際には山羊の肉の下ごしらえをし、調理のための火をおこす」で、この後に「しかし、パイユート族は自分たちの死者を火葬することはない」と続けるのは日本語として成り立たない。そのため、「しかし」を削除することにした。	パイユート族は自分たちの死者を火葬することはない。
10	it is traditional material.	こういった話が伝統的資料と呼ばれるものである。	• 文 2 で見た通り、traditional material を「伝統的資料」と訳しても意味は不明瞭である。したがって、「言い伝えられてきた話」とした。 • 論文にははっきり書かれていないが、ベネディクトがここで言いたいことは、カイバブ・パイユート族が言い伝えてきた話に火葬が登場するが、それは話の中だけの習慣で、火葬はカイバブ・パイユート族の文化の一部ではないということである。 • ベネディクトが言いたいことを強調するために最終訳では「…話にすぎない」とした。	これは言い伝えられてきた話にすぎない。

	原文	初期の翻訳	問題点	最終訳
11	It is equally true with regard to mythological concepts.	神話に現れる概念についても同じことが言える。	• 何が equally true なのか非常にわかりにくい。後述されたことから判断するしかないのでそのままにした。	神話に現れる概念についても同じことが言える。
12	Among the Serrano of Southern California I was repeatedly told that they knew nothing of the fate of the soul and had no concepts of an afterlife.	南カリフォルニアのセラノ族は死後の世界、魂の行く末に関して何の概念ももっていないと繰り返し聞かされた。	特に問題なし。	南カリフォルニアのセラノ族は死後の世界、魂の行く末に関して何の概念ももっていないと繰り返し聞かされた。
13	But on the same afternoon they might tell the story of Orpheus with considerable detail of the habits and food and life of the people of the dead.	しかし、そのすぐ後に死の世界へ行った人の話をし、死んだ人たちの習慣や食べ物や暮らし方についてくわしく語る。	• Orpheus（オルペウス）はギリシャ神話に登場する吟遊詩人だが、セラノ族がオルペウスの話をしたとは考えられない。オルペウスが象徴しているのは冥界に行って帰ってきた人だと考えられる。したがって、オルペウスではなく、「死の世界へ行った人」の話とした。	しかし、そのすぐ後に死の世界へ行った人の話をし、死んだ人たちの習慣や食べ物や暮らし方についてくわしく語る。
14	I am convinced that there was no contradiction in their minds.	彼らはそこに全く矛盾を感じていないのだろう。	特に問題なし	彼らはそこに全く矛盾を感じていないのだろう。
15	This lack of correspondence between the statements of folklore and the customs and beliefs of the people is often of great importance in the correct understanding of the material,	フォークロアのなかで言われていることと、その人たちの習慣や信じていることとの間にずれがあるということは、データを正しく理解する上で非常に重要である。	• ベネディクトは folklore という言葉をいくつかの意味で使っている。文 2 で folklore は traditional material を含んだものを指す。しかしこの文では、statements of folklore と customs and beliefs of the people が別なものとして扱われている。Folklore, tradition, customs and beliefs　それぞれの語の定義をせずに使っているので、意味を推測するしかない。	フォークロアのなかで言われていることと、その人たちの習慣や信じていることとの間にずれがあるということは、データを正しく理解する上で非常に重要である。
16	but at present we are under great difficulties in estimating it.	しかし、その重要性を理解するのは現在非常にむずかしい。	• ここで it が何を指しているのか明確ではない。直近の correct understanding of the material を指していると考えた。	しかし、その重要性を理解するのは現在非常にむずかしい。
17	The point which is essential to emphasize is that this is a matter which can be recorded only by the field worker.	ここで強調しなければならないことは、このようなずれを記録するのはフィールドワーカーにしかできないということである。	• ここで this が何を指しているか明確ではない。フィールドワーカーによってのみ記録することができるものを指しているのはわかるが、それが何なのかはっきりしない。前述の「フォークロアと実際の習慣や人々が信じていることとの間のずれ」を指していると考えられる。	ここで強調しなければならないことは、このようなずれを記録するのはフィールドワーカーにしかできないということである。

	原文	初期の翻訳	問題点	最終訳
18	No research or theory is likely to supply the omission.	そのずれをフィールドワーカーが記録しないかぎり、どのような研究も理論もそれを補うことはできない。	• The omission が何の脱落を指しているのか明確ではない。フィールドワーカーがフォークロアの中で言われていることと、実際の習慣や人々が信じていることとのズレを記録するのを怠ることを指しているのではないかと考えられる。このことは翻訳でもあまりはっきりしないが、そのままにした。	そのずれをフィールドワーカーが記録しないかぎり、どのような研究も理論もそれを補うことはできない。
19	Such annotations of tales by the recorder do not mean an intrusion of his point of view into the data,	記録者が物語に注釈を付け加えることは、データに自分の意見を差し挟むことにはならない。	• この文は非常に長いので、2 つに分けた。 • 文 19 の recorder はフィールドワーカーを指していると思われる。それを明確にするために「記録者」を「フィールドワーカー」に変えた。	フィールドワーカーが物語に注釈を付け加えることは、データに自分の意見を差し挟むことにはならない。
20	but on the contrary add another dimension to our understanding of the meaning of the story to the people who tell it, and make possible an otherwise impossible study of the hold which traditional material has upon mankind.	逆に、その物語を語る人たちに対する私たちの理解に新しい側面を与えてくれる。そして、そのような介入なしには、伝統資料がいかに人類に影響を与えているかを認識することはできない。	• but 以下は非常にわかりにくい。…add another dimension to our understanding of the meaning of the story までは「注釈が私たちの理解に新しい側面を与えてくれる」となるが、その後に続く to the people who tell it がどこにつながるのか明確ではない。文として成り立っていない。翻訳は原文が正しく書かれているものとして行うが、時としてこのように原文が間違っている可能性がある。 • Story を直訳すると「物語」になるが、ここではデータを指すと考えられる。 • 原文では …make possible an otherwise impossible study… となっているが、この文構造をそのまま訳すと日本語がわかりにくくなる： 「介入によって本来不可能である伝承されたことが人類に与える影響の研究が可能になる」となる。そのため文構造を変えた。	それどころか、注釈はデータの解釈に新しい側面を与えてくれる。そのような介入なくして、伝承されてきたことがいかに人類に影響を与えているかを知ることはできない。

4．翻訳上の問題点

ベネディクトが曖昧な表現を好んで使ったのは、一つに彼女の性格があると言える。ミードはベネディクトが見るに耐えないほどシャイだったと書いている（Mead, 1959, pp. 4–5）。ベネディクトは自分が言いたいことを強く主張する性格ではなかったようだ。もう一つの理由は、この論文の内容が当時の学術的環境においては、かなり論議を呼ぶような内容だったからではないかと推察できる。当時の文化人類学者はある部族、例えばネイティブ・アメリカンの一つの部族内で伝承されてきた、いわゆる traditional material を収集することに力を注いでいた。しかし、この論文でベネディクトは、部族内で伝承されてきたことを鵜呑みにし、それを彼らの文化と考えてはいけないと言っている。信用できるのは原住民ではなく、目で見たことを正確に記録するフィードワーカーの報告だとしたのである。

上のような推理ができるのは、これまでベネディクトに関するミードのコメントをいくつも読んでいるからである。そしてベネディクトの恩師ボアズがベネディクトに宛てた書簡の内容も推理の役に立っている。ベネディクトはボアズが奨励していた実証研究の影響を強く受けていたのである。このような背景知識に助けられてベネディクトの難解な文を読み解いていった。

ベネディクトの文章で翻訳者を悩ませる問題点はいくつかある。例えば、文が非常に長い。そして、用語をきちんと定義しない点があげられる。しかし、私たちを一番悩ませた問題は上に述べた coherence、cohesion の問題である。ベネディクトは folklore や traditional material といった用語が何を指しているのか定義しないままそれを同意義で使ったり、狭義、または広義で使ったりする。

同じ概念を異なる語彙で表すのは cohesion の一種で、lexical cohesion と呼ばれている（Halliday & Hasan, 1976）。例えば、ロンドンにある有名デパート Harrods を the splendid Knightsbridge store と呼んだり、the flagship Harrods と呼んだりすることによって談話の中の要素をつなぎ合わせることができる（Baker, 2011, p. 232 の例）。しかし、Baker（2011, p. 232）が言っているようにロンドンについて知識を持っていない読者はこれらの言い方が同じものを指していることを理解しにくい。それがもし同じものを指しているなら、なぜそのような言い換えができるのか、読者が割り出さなければならない。

本稿で取り上げたベネディクトの論文の theme は folklore 研究におけるフィールドワーカーの役割である。そのため、folklore 研究の中の folklore とは何かが非常に重要になってくる。その解釈をどのように行ったか最初に示したい。

4.1　Folklore と traditional material の関係

この論文に用いられている folklore や traditional material は特別な意味をもつ用語である。しかしベネディクトはその用語について全く説明することなく、文章に用いている。問題を含む

原文をあげ、どのような過程で最終訳としたのか順次解説を加えていく。

4.1.1　Folklore

Folklore が最初に出てくるのはタイトル部分の A Matter for the Field Worker in Folklore である（表の文1）。次に出てくるのが文2の長文の中である：The more intimate our knowledge of folklore the more conscious we become of the part played in it by traditional material, as distinguished from the role of firsthand observation, definite recording of tribal custom, tribal history and the like. この文で、folklore は traditional material と、それと相対する firsthand material から成ることがわかる。次に見られる folklore は、文4の形容詞的使用法である：This same skepticism concerning the face-value of folkloristic material holds also in the matter of customs and of belief. ここでは、folklore 的な資料は必ずしも信頼できないことを述べている。この文では、文2と違い、folklore は狭義で使われているようである。つまり、firsthand material を含めない、traditional material を指しているように思われる。

次に folklore が現れるのは文15である：This lack of correspondence between the statements of folklore and the customs and beliefs of the people is often of great importance in the correct understanding of the material, but at present we are under great difficulties in estimating it. ここでも folklore は狭義で使われているように思える。

ベネディクトが folklore という用語で何を指しているのかを明確にするためには、traditional material が何を指しているのかをはっきりさせる必要がある。

4.1.2　Traditional material

上で見た通り、traditional material が最初に使われているのは文2である：The more intimate our knowledge of folklore the more conscious we become of the part played in it by traditional material, as distinguished from the role of firsthand observation, definite recording of tribal custom, tribal history and the like. ここで traditional material は firsthand observation, recording of tribal custom, tribal history と対比して取り上げられている。つまり、部族が実際に行なっていることとは異なる内容のデータを指している。次に見られるのは上の文に続く文（文3）で、tradition が material と切り離されて使われている。そのため、同じ意味で使われているのか不明瞭である：We no longer make painstaking analyses of the migration legends of southern North America, and the absence of such traditions is not regarded as proof of a prehistoric origin at that spot. ここでは、部族の移住に関する伝説を根気よく分析する「伝統」がなくなっていることを述べている。前文の traditional material とは関係ない tradition という語の使い方のように思える。

次に traditional material が現れるのは文10である：パイユート族の「だまされた」ダンサー

の話の中でラットが山羊と鹿を火葬すると約束する場面がある。しかし、パイユート族は火葬をしない部族だと述べた後、「だまされた」ダンサーの火葬に関する話は traditional material だと述べている：However, the Paiute never burn their dead; it is traditional material.

文2で traditional material は folklore と対比して使われているが、文10で、folklore は traditional material ではなく、the customs and beliefs of the people と対比されている。ここで考えられることは、folklore と対比するものとして、the customs and beliefs of the people が traditional material と同一なのではないかということである。

Traditional material が次に出てくるのは文19～20である：Such annotations of tales by the recorder do not mean an intrusion of his point of view into the data, but on the contrary add another dimension to our understanding of the meaning of the story to the people who tell it, and make possible an otherwise impossible study of the hold which traditional material has upon mankind.

ここでわかることは traditional material が人類に大きな影響を与えていることである。

4.1.3 Folklore と traditional material

上述した folklore と traditional material の使い方を見ると、traditional material は、部族内で言い伝えられてきたことで、実際に行われていることと対比して使われている。例えば、「だまされた」ダンサーの話では「火葬」が言い伝えられているが、パイユート族は実際には火葬することはない。Folklore は、traditional material も、実際に行われていて文化人類学者が firsthand で観察できることも含む。しかし、時にベネディクトは traditional material を folklore と呼ぶこともある。部族内で言い伝えられてきた traditional material というのはその部族に大きな影響を与えていて、実際に行われていることを覆い隠すこともありうるので、文化人類学者は絶えず現場がどうなっているのかを確かめる必要があるというのがこの論文の主旨であるように思える。この主旨は明確に述べられているわけではない。これは初見の時はまったくわからなかった。しかし、ベネディクトとベネディクトの恩師ボアズとの書簡のやり取りなどを訳しているうちに、実際に観察できることを重視するボアズの研究姿勢が明らかになり、ベネディクトはそれを受け継いでいると感じられた。そういった背景知識があって初めてベネディクトがこの論文で何を言いたいのか理解できたと言える。

4.2 Theme の解明

上のセクション4で folklore が traditional material と、フィールドワーカーが現場を実際に観察して集めたデータの両方を含んでいるということが解明された。これがわかって初めてこの論文の theme が理解できる。この論文のタイトル A Matter for the Field Worker in Folklore はセクション4で述べたことをもとに訳した。その過程を下に記す。

4.2.1　タイトル：A Matter for the Field Worker in Folklore

A Matter というのは非常に抽象的な語でそれが何を指しているのか、論文を最後まで読まないとわからない。フォークロアも特定の部族のフォークロア（民俗）を指しているのか、フォークロア研究を指しているのか明確ではない。「フォークロアにおけるフィールドワーカーの役割」は日本語として成立しないし、意味がわからない。フォークロアの中のフィールドワーカーの役割ではなく、フォークロア研究におけるフィールドワーカーの役割ではないかと考えた。

また、この論文で field worker に関する記述は文17のみである。しかし、論文を読み終えるとベネディクトが言いたいのは、原住民が自分たちの文化だと信じている traditional material と、その部族が実際に行なっている習慣・儀式の違いを見分けることができるのはフィールドワーカーだけであり、それを記録するのがフィールドワーカーの役割だということがわかる。そのため、ある部族のフォークロアを研究するにあたって、フィールドワーカーはそのことを念頭に入れておかなければならない。A matter というのは、つまりフォークロア研究におけるフィールドワーカーの役割のことである。

4.3　ST の中の coherence を探る

ベネディクトは自分が言いたいことを読者に汲み取ってもらおうとする傾向があり、言いたいことを全て書き出さないという特徴がある。文の意味はわかっても、なぜここでこれを言うのか、前に書いたことと、後に書かれていることとどうつながるのか読者が判断しなければならない場合が多々ある。つまり、翻訳者は、どのように解釈したら ST の首尾一貫性が保たれるか探らなくてはならないのである。以下はその例である。

4.3.1　文3：We no longer make painstaking analyses of the migration legends of southern North America, and the absence of such traditions is not regarded as proof of a prehistoric origin at that spot.

文の前半の「我々研究者は北米南部の移住に関する言い伝えを苦労して分析しなくなった」ということと、後半の「そのような言い伝えが存在しないからと言ってその民族が有史以前からその地にいたことにはならない」という文がどのようにつながって、ST 全体の theme をサポートしているのか初見では全くわからなかった。最初は言い伝えを分析しなくなったことを否定的に語っているのかと思ったが、文4を読むと言い伝えは必ずしも信用できないと考えていることがわかる。そのため、表現を少し変えて、分析しないことは問題ではないような言い方にした。また、文中の origin が何の origin なのかわからない。その民族の origin ということだろうか。私たちはその民族の origin と解釈した。

この文が ST 全体の theme とどう関連しているかというと、北米南部の移住に関する legends（言い伝え）もベネディクトがいう traditional material だと推理できる。そして彼女がここで言

いたいことは、traditional material が存在しないというだけで、その地に人々が移住していないと考えてはならないということだと考えられる。つまり、traditional material だけに頼ってその地の人々について語ってはいけないと警告しているのではないだろうか。

4.3.2　文 11：It is equally true with regard to mythological concepts.

「神話に現れる概念についても同じことが言える」という文だが、「同じこと」が何を指しているのか明確ではない。この文は、パイユート族の物語に火葬の話があるが、パイユート族は実際には死者を火葬しないと述べた後に続く。「神話においても同じことが言える」ということは、神話の中で言われていることが実際に行われていることと同じであるとは限らないという意味だと推測するしかない。この文に続く神話の例を見ると、その推測が正しいと言える。次の例では、セラノ族が自分たちは死後の世界について何の概念も持っていないと言っておきながら、神話の中の死者の暮らしについて詳しく話すことを述べている。つまり、神話の内容とセラノ族が実際に知らないと言っていることとは異なるのである。部族が語る神話においても、「だまされた」ダンサーの話にしても言い伝えられている話の内容と部族の実際の暮らしの中で信じられていること、あるいは実践されていることの間にはズレがあるのである。これはこの部分を何度か読み返して理解できたが、ベネディクトの説明の不充分さを感じずにはいられない。

4.4　Cohesion による文と文のつながり

セクション 2 および本セクションのはじめで cohesion について説明した。Cohesion の種類として代名詞で先行詞を指すことによって文と文をつなげる cohesion（reference）と他の名詞あるいは名詞句を使って前に述べたことを指す lexical cohesion がある。ベネディクトの ST にもこのような cohesion がいくつか現れるが、cohesion が先行の何を指しているのか明確ではないことがある。下はその例である。

4.4.1　文 15〜16：This lack of correspondence between the statements of folklore and the customs and beliefs of the people is often of great importance in the correct understanding of the material, but at present we are under great difficulties in estimating <u>it</u>.

この文の最後の it が何を指しているのかはっきりしない。直前の the correct understanding of the material を指していると考えたが、「正しい理解を推定する」というのはおかしい。そうなると it が指しているのは、great importance ではないかと考えられる。つまり、「その重要性を推定するのが難しい」ということになる。

4.4.2　文17：The point which is essential to emphasize is that this is a matter which can be recorded only by the field worker.

この文は上の文15～16に続く文である。文中のthisが何を指しているのか不明確である。フィールドワーカーにしか記録できないことを指しており、ベネディクトはそのことを強調したいということは汲み取れるが、フィールドワーカーにしか記録できないことが何なのか、thisは具体的に何を指しているのかコンテクストから読み取るしかない。直前の文では「フォークロアのなかで言われていることと、その人たちの習慣や信じていることとの間にずれがあるということは、データを正しく理解する上で非常に重要であるが、その重要性を理解するのは現在非常にむずかしい」ことを述べている。その流れから解釈すると、「その難しさはフィールドワーカーにしか記録できない」となるであろう。しかし、全体のthemeを考えると、フィールドワーカーにしか記録できないのは、フォークロアで言われていることと、部族が実際に行なっていたり、信じたりしていることとの違いであると思われる。しかし、これはthemeを十分理解しないとわからない。なぜならば、This lack of correspondence between the statements of folklore and the customs and beliefs of the peopleは、thisとかなり離れているからである。

4.4.3　文18：No research or theory is likely to supply the omission.

この文は上記の文17に続く文である。文17を見るとわかるようにomissionに言及している箇所はない。その前の文15～16を見てもomissionに言及していない。しかし、文17でフィールドワーカーにしか記録できないことがフォークロアと実態とのギャップであると推理した。Omissionが指しているのは、このようなフィールドワーカーにしかできないことを怠ることを指しているとしか思えない。そして、これを怠るとどんな研究も理論もそれを補うことができないと言っている。このようにベネディクトが言わんとしていることを汲み取るのにかなりの試行錯誤を要する。ベネディクトの文章の構成を見ると次のようになっている。

（a）This lack of correspondence between the statements of folklore and the customs and beliefs of the people is often of great importance in the correct understanding of the material, but at present we are under great difficulties in estimating it.
（b）The point which is essential to emphasize is that this is a matter which can be recorded only by the field worker.
（c）No research or theory is likely to supply the omission.

（a），（b）の文の後にすぐに（c）の文が来ているが、本来ならば、（b）と（c）の間に、もし、フィールドワーカーが記録することを怠ったら、という節が入らなければならない。（c）は、フィールドワーカーが記録することを怠った場合、どんな研究も理論もそれを補完できない、

と言っているからである。ベネディクトはその間のステップを書いていないため、読み手は彼女の文を理解するのに非常に苦労する。

5．最終訳

上のセクション4で述べたような試行錯誤を経てたどり着いた最終訳をこのセクションで示す。論文は非常に短いが、長い注釈がついている（注1参照）。この注釈はM. ミードによって入れられたものだと考えられる。注釈ではこの論文が書かれた当時のフォークロア研究の実態を示す例が3つあげられている。これらの例がどうしてこの論文の注釈に加えられているのか推理するのもcoherenceの問題だと言える。論文のthemeが明らかになって初めて、注釈にあるどの研究例もベネディクトがこの論文でtraditional materialとよんでいるデータに基いてその部族のことを語っている研究だと考えることができる。なお、下の翻訳は福井氏と一緒に行ったものであることを付け加えておきたい。

フォークロア研究をする際にフィールドワーカーが考慮するべきこと＊1

フォークロアの知識が深まれば深まるほど、部族の中で伝承されてきたことがフォークロア研究の中でどのような役割を果たしているかについて考えさせられる。伝承されてきたことは、直接観察することによって得たデータ、部族の習慣や歴史などを記録したものとは異なった役割をもっている。北米南部の部族の移住に関する言い伝えを苦労して分析する人はいなくなったが、そのような言い伝えが存在しないからといって、大昔からその地に人が住んでいたと考えることはできない。

フォークロア的データをそのまま受け入れてはならないのと同様に、部族の習慣や信仰について地元の人が言っていることもそのまま受け入れてはならない。例えば、ズニ族にはホピ族と同様に恋愛対象者に対して色々なものを貢ぐといった話は数多ある。しかし、これはズニ族の習慣ではない。もう一つ例として、カイバブ・パイユート族の「だまされた」ダンサーの話がある。この話の中でラットは殺していない山羊と鹿を家に帰らせ、死んだ山羊と鹿を日没に火葬すると約束する。しかし、実際には山羊の肉の下ごしらえをし、調理のための火をおこす。パイユート族は自分たちの死者を火葬することはない。これは言い伝えられてきた話にすぎない。

神話に現れる概念についても同じことが言える。南カリフォルニアのセラノ族は死後の世界、魂の行く末に関して何の概念ももっていないと繰り返し聞かされた。しかし、そのすぐ後に死の世界へ行った人の話をし、死んだ人たちの習慣や食べ物や暮らし方についてくわしく語る。彼らはそこに全く矛盾を感じていないのだろう。

フォークロアのなかで言われていることと、その人たちの習慣や信じていることとの間にず

れがあるということは、データを正しく理解する上で非常に重要である。しかし、その重要性を理解するのは現在非常にむずかしい。ここで強調しなければならないことは、このようなずれを記録するのはフィールドワーカーにしかできないということである。そのずれをフィールドワーカーが記録しないかぎり、どのような研究も理論もそれを補うことはできない。フィールドワーカーが物語に注釈を付け加えることは、データに自分の意見を差し挟むことにはならない。それどころか、注釈はデータの解釈に新しい側面を与えてくれる。そのような介入なくして、伝承されてきたことがいかに人類に影響を与えているかを知ることはできない。

注

* *Journal of American Folk-Lore*, 第36巻、139号、1923年、104ページ

1 *Journal of American Folk-Lore* の同じ巻で、この時代のフォークロア研究の傾向がはっきりとわかる。例えば、論文 'Beliefs and Tales of the Canadian Dakota'（前掲書参照、36ページ）の中で、ウイルソン D. ウオリスは次のように述べている。

> 自然哲学は、個人が捉える世界を記述しようとしなければならない。ダコタ族の世界は、我々と同じく、彼らが見たものであると同時に彼らが創り上げたものである。彼の「空想」だと我々が呼ぶものは彼らにとっては奥が深く、ありありとした現実なのである。社会的、心理的、擬似科学的世界における個人を位置づけるには、その世界、その世界の規則、そしてその世界における物事の関係を完全に記述する必要がある。これはかなり無茶で冒険的な作業ではあるが、これを道しるべにして前に進むのが良いと私は思う。

また、論文 'Two Chinese Folk-Tales'（Edward Sapir and Hsu Tsan Hwa、前掲書参照、23ページ）でエドワード・サピアは次のように書いている。

> 次の中国民話は私の友人でカナダの中国領事館秘書官である Mr. Hsu Tsan Hwa が書いて、私が訂正を入れたものである。Mr. Hsu は、これらの民話を故郷の満州で聞き、現在の民話の典型的なものであると感じた。"Wang Pao Ch'uan" の話は私たちの文化のロマンチックな物語と共通するところがある。"Min Tzu Chien" の話は中国人の性格を特に表している。それは親孝行だということである。

また、論文 'Zuni Names and Naming Practices'（前掲参照、140号、171ページ）でエルシー・クルーズ・パーソンズは次のように書いている。

> ズニ族の命名の習慣に関する資料があまりなく、間違いも多い。そのため、次のベア一族の名前のリストとそれに関する情報提供者のコメントが興味深い。ベア族は比較的小さい一族である。私の情報提供者はベア一族と婚姻関係にあり、一族の中のマッサリーナ家と親しかった。ベア一族の一家族の娘にベア一族の家族の名前を聞いたところ、彼女はそれを断った。それまで様々なことを彼女に聞いた時には驚くほど率直に協力的に答えてくれたにも関わらず。自分たちの名前は Ochochina（w）の名前からきている。Ochochina の他の名前は Tsaiutits'a（父方の母、Turkey からきている）、Malia Panchu（スペイン語名）、そして Yuneaititsa（Big-Firebrand 会で使う名前）である。

Ochochina（W）＝ Tsaiutits'a（父方の母、Turkey からきている）
Malia Panchu（スペイン語名の Maria）
Yuneaititsa（Big-Firebrand 会で使う名前）

Ochochina はニックネームである。聖人のダンスが行われていた時ダンサーの一人である女の子の毛が聖人と同じように縮れていることに気がつき、それからその子は縮毛という意味の chinapa と、「誰かと同じになりたい、あるいは誰かと同じものを持ちたい」という意味のことばからきている Ochochina と呼ばれるようになった。私たちの持っている名前のリストの中でニックネームはこれだけだが、ズニ族がニックネームを使うのはよくあることである。例えば、Kluptsin, つまり、「黄色」と呼ばれている男は、ある時着ていた黄色いシャツによってそう呼ばれるようになった。また、「少量の血」という意味の Atsitsana と呼ばれている街の触れ役は、彼が少年だった時のある事件に由来した名前である。また、Koluwisi という名は、この子が生まれる前に母親が「羽毛が生えた泉の蛇」という名の男と関係を持ったことに由来する。子供の時に道化師の ne'wekwe によって即席の祭壇の上に乗せられ、聖人扱いされたということで Ne'santu という名前になった男もいる。

6．結び

翻訳者というのは絶えず原著者が書いていることは辻褄が合っているはずだと信じ、その辻褄が合うにはどう解釈したらいいのか探っている。たとえ原文がわかりにくいとしても、翻訳者の仕事はそれをわかり易く訳すことである。なぜなら、翻訳者は語を置き換えるという作業を担っているだけではなく、原著者が言おうとしていることを読者に伝えなければならないという使命をもっているからである。そのために私たちはベネディクトが用いる folklore や、traditional material の意味を探り、この論文でベネディクトが何を言おうとしているのかを探り、代名詞や言い換えの使い方を明らかにしようとしたのである。上記に示した例によって、翻訳者が言語を置き換える作業の他にどれだけの作業を行なっているかを示すことができたと思う。翻訳者に求められているのは、二つの言語に関する知識の他に、原文を解釈するための様々な手段を持ち合わせていることである。それは文化人類学におけるベネディクトのスタンスに関する知識であったり、ベネディクトに大きな影響を与えたボアズに関する知識であったり、ネイティヴ・アメリカンの文化に関する知識であったりする。翻訳のプロセスを研究するにあたって、このような言語外の知識がどのように活用されて ST の中の文と文のつながりが見出され、ST 全体の首尾一貫性が理解されているのかを少しでも示すことができたことを願う。

参考文献

Baker, M.（2011）. *In other words: A coursebook on translation.* London: Routledge.

Bell, R.（1991）. *Translation and translating: Theory and practice.* London: Longman.

Catford, J.C.（1965）. *A linguistic theory of translation.* London: Oxford University Press.

Halliday, M.A.K. & Hasan, R.（1976）. *Cohesion in English*. London: Longman.

Halliday, M.A.K.（1985）. *An introduction to functional grammar.* London: Edward Arnold.

Halliday, M.A.K.（1994）. *An introduction to functional grammar*（2nd edition）. London: Edward

Arnold.

Halverson, S.L. (2013). 'Implications of cognitive linguistics for translation studies' In A. Rojo & I. Ibarretxe-Antuñano (Eds.). *Cognitive linguistics and translation* (pp. 33–73). Berlin: Walter de Gruyter.

Jakobsen, A. L. (2006). 'Research methods in translation – TRANSLOG'. In K. P.H. Sullivan & E. Lindgren (Eds.). *Computer keystroke logging: Methods and applications* (pp. 95–105). Oxford: Elsevier.

Krings, H. (1986). 'Translation problems and translation strategies of advanced German learners of French (L2)'. In J. House & S. Blum-Kulka (Eds.). *Interlingual and intercultural communication* (pp. 263–275). Tübingen: Gunter Narr.

Lörscher, W. (1991). *Translation performance, translation process, and translation strategies: A psycholinguistic investigation.* Tübingen: Gunter Narr.

Mead, M. (1959). *Anthropologist at work : Writings of Ruth Benedict*. New York: Houghton Mifflin Company.

Reiss, K. (2000). *Translation criticisim: Potential and limitations.* (E.F. Rhodes, Trans). Manchester: St Jerome and American Bible Society. (Original work published in 1971)

Vinay, J.P. & Darbelnet, J. (1958). *Stylistique comparée du français et de l'anglais: Méthode de traduction.* Paris: Didier.